

都留文科大学

# 地域交流センター通信

Vol.09

MARCH 2006

Front view

日・中・韓の障壁を見据えて  
しょうへき  
共同歴史教材づくりの挑戦

笠原十九司



特集

地域で働き人をつつなぐ

地域の自然と文化をつなぐ仕事を見出す  
障害者の就労を支援する  
都留の織物業の歴史―研究紹介―

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子



『未来をひらく歴史』は、巻頭の「読者のみなさんへ」において、歴史を学ぶ目的をこう記しています。

東アジアに平和の共同体をつくるためには、その前提として歴史認識の共有が不可欠です。歴史認識を共有することへ

願っています。  
(かさはら とくし・本学比較文化学教科教員)

の理由です。  
\*  
『未来をひらく歴史』は、巻頭の「読者のみなさんへ」において、歴史を学ぶ目的をこう記しています。

東アジアに平和の共同体をつくるためには、その前提として歴史認識の共有が不可欠です。歴史認識を共有することへ

願っています。  
(かさはら とくし・本学比較文化学教科教員)

アジア共同体、すなわち国家、国境の枠を超えた東アジア市民社会を形成することを旨として、日・中・韓の研究者、教師、市民が3国に民間団体の日中韓3国共通歴史教材委員会を組織し、2002年から編集作業に取り組み、11回におよぶ国際編集集議を開催しながら、2005年5月下旬に3国同時刊行を実現したのです。

私たちが歴史を学ぶのも、過去を教訓として未来を開拓するためなのです。過ぎ去った19〜20世紀の東アジアの歴史には、侵略と戦争、人権抑圧などの洗いがたい傷が染み付いています。過ぎ去った時代の肯定的な面は受け継ぎながらも、誤った点を徹底的に反省することによって、私たちはこの美しい地球で、より平和で明るい未来を開拓することができるとは思っています。

平和と民主主義、人権が保障される東アジアの未来を開拓するために、私たちが歴史を通じて得ることができ、教訓は何でしょうか。この本を読みながらみんなで一緒に考えてみましょう。

東アジアに平和の共同体をつくるためには、その前提として歴史認識の共有が不可欠です。歴史認識を共有することへ

願っています。  
(かさはら とくし・本学比較文化学教科教員)

東アジア市民社会の形成には世界的な立場からの歴史認識の共有が不可欠になります。その実現のための歴史の道程はまだはるかな未来かもしれませんが、『未来をひらく歴史』は最初の一步としての挑戦になったと思います。3国ともすでに同教材の改訂作業に取り組んでいます。同歴史教材の完成度を高めるために、日本側の代表編集者の一人として私も努力を続けていく決意です。

東アジアに生きる市民が、侵略戦争と植民地支配の歴史を事実にもとづいて学び、過去を克服するための対話と討論を重ねることを通じて、確実に切り開かれます。

戦争終結から60年目の2005年8月15日、日本では全国戦没者追悼式、中国では「中国人民抗日戦争と世界ファシズム戦争勝利60周年記念式典」、韓国では「韓国光復(独立)60周年記念式典」と3国間で対立する内容の記念行事がそれぞれの政府主催で行なわれました。日本ではこの日、小泉純一郎首相の靖国神社参拝はなかったものの、少なからぬ閣僚と国会議員が参拝を行ない、中国、韓国の両政府から抗議を受けました(小泉首相はその後10月17日に5回目の靖国神社参拝を行ない、中国政府は町村外相訪中を拒否、韓国も日韓首脳会談の困難を表明して抗議を行ない、不信・反発を強めました)。

一方ヨーロッパでは、ドイツが連合国に無条件降伏した日を記念して、5月8日、9日を「記憶と和解の日」と定めて、各国で記念式典を催しました。

『未来をひらく歴史』は、平和な東

\*

「記憶と和解の日」は国連総会の「第二次世界大戦終結60周年を記念する決議」(2004年11月)に基づくもので、「記憶」とは、まず歴史認識であり、ファシズム、軍国主義を明確に否定する共通の認識と決意に立つてこそ、未来に向けた協力を可能にする「和解」がすすむと、同決議の前文で述べています。モスクワでは5月9日、ロシアのプーチン政権の主催のもと、ドイツのシュレーダー首相、フランスのシラク大統領、アメリカのブッシュ大統領らが出席した記念式典が開催され、かつて敵味方に分かれていた各国の代表らが、侵略の歴史を繰り返さず、現代の人類が対応する姿勢をアピールした場となりました。ドイツでは、連邦レベル、各自治体レベルでも「記憶と和解の日」の行事が行われ、ドイツはナチスドイツの「過去の克服」を基本的に達成し、近隣諸国ならびにヨーロッパ連合(EU)において信頼関係を確立

したことを印象づけました。2005年の東アジアは、靖国問題や歴史教科書問題、日本人の戦争認識、歴史認識をめぐる中国、韓国から批判と抗議があり、これにたいして日本側からの反発が起り、8月15日は上述のように「記憶と和解」にはほど遠い、3国間の軋轢と亀裂の溝の深さを世界に印象つけた日となりました。

\*

しょうへき  
日・中・韓の障壁を見据えて  
共同歴史教材づくりの挑戦

笠原 十九司



# 地域で働き人をつなぐ

木楽舎の“つみ木広場”と岡部工業所の“薪ストーブ・シンポジウム”

都留市立図書館は、木楽舎（山梨県中央市）の荻野雅之さんを招いて2005年11月6日に「つみ木広場」を開きました（関連記事「たぐさんの出会いをつくった小さなつみ木」を参照）。家具づくりを専門にする木工所である木楽舎が、間伐材でつみ木を作り、つみ木遊びの会を開催することには「森を再生したい」という願いがこめられています。都留市立図書館の「つみ木広場」をきっかけに木楽舎の荻野さんと交流の機会をもった地域交流研究センターフィールドミュージアム部門では、2006年春と秋に幼児教育関係者と「つみ木広場」の意義をいっそうひろく、深く学ぶ交流企画「つみ木広場シンポジウム」を準備しています。

一方、岡部工業所（山梨県大月市）は、薪ストーブを楽しむことを通じた森の再生を提案しています。手広く鉄工業をいとなんでいた岡部工業所は、かつては特注にに応じて薪ストーブを作る程度でした。しかし、パブル経済の崩壊（1991年2月）で事情は一変しました。岡部工業所の佐々木裕子さんによると、建築関係の仕事がとたえ、やがて銀行の融資も打ち切られ、従業員の給料の支払いさえ難しくなったということです。あらゆる努力をおしまない佐々木さんは、工場のまえに「手づくり薪ストーブ」の看板をだしてみました。すると、薪ストーブを買うのは都会の人、と思いついていたのとは違い、地元の人たちが頻りにショールームによってくれるようになり、お客さんといっしょに薪ストーブのよさを考える「薪ストーブ・シンポジウム」を開くまでになりました。このような地域の産業と文化の動向は、地域交流研究センターが果たした役割についても、さまざまに示唆するところがあります。

（編集部・今泉）



岡部工業所の薪ストーブ



木楽舎の「楽つみ木」

## たぐさんの出会いをつくった

### 小さなつみ木

青池恵津子

「小さなつみ木が大きなものに変身し、子どもの姿もキラキラと輝きました。」「こんなに集中するわが子を見ることがありません。」「感動をありがとうございます。」

2005年11月6日、都留市立図書館の「つみ木広場」に参加した皆さんの感想です。

出合いは一枚のチラシ。昨年2月、「これ、おもしろそうだ。図書館まつりでできるかな。」図書館長から渡されたのは「県立科学館・つみ木広場」のお知らせでした。市立図書館では、毎年秋の読書週間に図書館まつりを開催しています。一昨年は、『思い出株式会社』（清水書院、1983）の著者、本県出身の映画俳優・土屋嘉男さんの講演会を開き、多くの方々に図書館に親しんで頂きました。その図書館まつりで「積み木遊び」とは……私は腰が引けました。

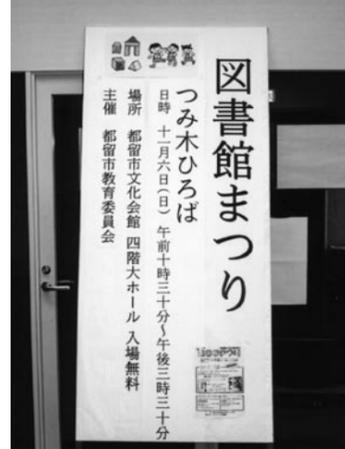
3月初旬、私は小三の姪を連れ、半信半疑で、甲府の科学館に、「木楽舎つみ木研究所」の荻野雅之さんを訪ねました。会場では真っ赤な敷物の上で、大勢の親子が真剣に、楽しそうに、つみ木を積んでいます。お城、橋、遊園地、身長より高い塔、等々。初めて触れる「楽つみ

木」は、カラカラと軽く、手にやさしく、清々しい木の香りを放ち、1万5千個の量で迫ってきます。荻野さんは助言や呼びかけをしながら会場を歩き、創作を励まします。「森を元気にするため、ヒノキの間伐材でつみ木を作っています。」そうつみ木運動を語る荻野さんの話には、「都留で入広場を開こう！つみ木で森と図書館をつなぎたい。」と心がはりました。

「図書館まつり・つみ木広場」には、市内外から400人もが集まり、満員御礼の大盛況となりました。また、都留文科大フィールド・ミュージアムの協力で先行開催した『森の絵本・絵画・写真展』では、都留の森をテーマにした展示が新聞・テレビで取り上げられ、楽つみ木と併せて話題を呼びました。都留大生の根木直子さん（つる子どもまつり事務局）・飯島千恵さんもボランティアで参加してくれました。3センチの小さなつみ木はたぐさんの出会いをつくってくれました。

（あおいけ えつこ・都留市立図書館司書）

都留市図書館で開催された「つみ木広場」（2005年11月6日、写真提供・青池恵津子さん）





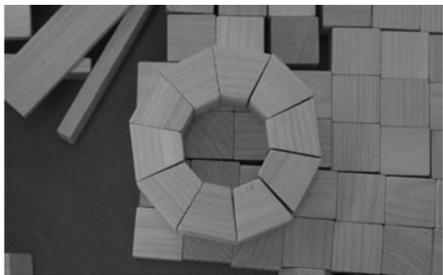
# 「つみ木広場」は森と木と人をつなぐ メジャー級の变化球を！

木楽舎つみ木研究所 荻野 雅之

私は木楽舎きらくしゃという家具工房を経営する木工家です。家具創りのかたわら、八年前から、山梨県産のヒノキの間伐材で、小さなつみ木「楽つみ木」(30目)が基準の3種類、立方体、底辺5目の台形、長さ12目の板)を造っています。今では全国の保育園、幼稚園、小学校、学童保育、などで使われています。ただのつみ木がこんなふう

8年前、毎年参加する清里のポールラッシュ祭のころ、私の家族(長男)がもらった「家具だけじゃなく、子どもも遊べるものを作って」という一言から、「つみ木創り」がはじまりました。ちょうどヒノキのつみ木をつくりはじめたころ、「山から木が降りてこなくて製材所が危ない」という報道番組を見、多くの人工林が、手入れがいきとどかず、有機的な関係が崩れているということを知ったのです。口先だけで

「林業が厳しい」「山は危機だ」といっても世間は振り向きません。人びとを納得させるためには、「木を活かす技術」をもった者たちが地域の山に目をむけ、そこから出た木を「具体的に活かさねば」、という思いがありました。ヒノキのつみ木は、関心を寄せてもらう一つの小さなきっかけになるのではないかと考えたのです。私はこの発想をメジャー級の变化球といっています。



3種類の小さなつみ木

以来、ヒノキのつみ木をつくり続けていますが、その「楽つみ木」は、保育園、幼稚園、小学校などで購入されています。また二万個のつみ木を持って、「つみ木広場」というものを地域の子ども会、保育園、幼稚園、小学校で開いています。つみ木で思いきり遊んだ後に、つみ木が生まれる山の話をし、森林を再生するためのつみ木なんだと話す、子どもたちにはすごく伝わります。

これからの主人公である子どもたちに、木に触れながら、香りや、木の良さを味わってほしい。木の味わいを、人間の「右脳」で知ってもらいたい。そういうことから森林を大切にすることが育ってくれたら、と思います。

はじめは、子どもたちがつみ木でどんなに遊ぶと思いませんでした。おとなの目線・興味と子どものそれは違うのでしょうか。子どもたちがつみ上げるつみ木は、どれもこれもが芸術作品です。そして、子どもたちのつみ木への関心は衰えません。子どもたちは思いどおりにならないとき、新しい工夫を試みようとするのなかにいます。苦労し積み上げて完成したときの喜び、せつかく積み上げたのになあという間に崩れてしまう時の妙な興奮。と

ちゅうでつみ木が成長しないことに気づくこともあります。そして空間を分けあう連帯感、安らぎ、自信。「つみ木広場」を通じて子どもたちは「新しい自分」を発見します。そんなところが「つみ木広場」の魅力です。

私たちはその運動をしつかりしたものにするために、木楽舎つみ木研究所というものをつくりました。

「つみ木広場」が始まって8年目に入ります。この運動が全国的に少しずつ広がっていく、理解者が確実に増えてきています。今年は、楽つみ木運動のとても重要な一年になると思っています。

また、今年は、都留文科大学フィールド・ミュージアムと共同で、森と子どもと遊びと「楽つみ木」をむすぶ「つみ木広場シンポジウム」を計画しています。アカデミックなアプローチと、つみ木運動とがもたらす新しいアートワークシヨップを、参加された皆さまと共有できればと思っています。



# 手作り薪ストーブの個性あふれる愛好者の交流をはかる

## 私がウォールデン池を訪れた理由

佐々木 裕子

私の会社は大月市で鉄工所を営んでいます。私の主人で三代目で、私の祖父が大正10年に創業した「村の鍛冶屋」にさかのぼります。15年ほど前、友人のクラフト（手作り工芸）作家に薪ストーブを造ってほしいといわれたのがきっかけになって、薪ストーブの製作をはじめました。薪ストーブの需要は少しずつ増え、この数年は急激に売り上げが伸びています。

と「ウォールデン」と名付けました。というのは、薪ストーブを楽しむことを通じて、身近な自然の豊かさを知ってほしいと願ったからです。今年の春、私は薪ストーブのビジネスと勉強をかねて、念願のカナダでかけることができました。さらにそこから、ソローが『森の生活』を書いたキャビン（小屋）レプリカーを訪ねるため、マサチューセッツ州コンコードに向かいました。ソローがどんな薪ストーブを使っていたか、自分の目で確かめるためでした。

近年、スローライフが話題となり、薪ストーブが見直され、私の会社に全国からさまざまな方が訪ねてこられています。それら薪ストーブの愛好者に共通していることは、個性あるストーブの楽しみ方を身につけておられることです。そこで、私は薪ストーブのよさをもっとお互いに知りあおうと、「薪ストーブ・セミナー」や「クッキング・ワークショップ」を開催することにしました。

られることを知り、ぜひとも先生にソローの研究者として薪ストーブについてのお考えをお話しては頂けないかというところで、薪ストーブのシンポジウムを企画しました。このシンポジウムは、竹割り、炭焼き、今泉さんのお話と、内容盛りだくさんで充実した一日となりました。薪ストーブ好きのこだわり頑固オヤジが集まるのかと思いきや、皆さんほがらかで、力みがない薪ストーブ好きといった雰囲気でお話ししやすかった。（中略）今泉さんが試作された小型ストーブは、木が落とした枝が使えるという点にとても共感しました。」などの感想が寄せられています。

これまで薪ストーブは高価な贅沢品であり、別荘のような非日常的な場でインテリアとして楽しむイメージでした。ところが最近薪ストーブの優れた暖房能力やエコロジカルな良さを見直し、料理などの日常生活に薪ストーブを取り入れる方が増えてきました。そこで数年前から、私の会社では、装飾を極力おさえて機能に特化した定番シリーズの薪ストーブを売り出しました。それらの新型薪ストーブに、私は子どもの頃に読んだ、ヘンリー・D・ソローの『森の生活』を思い出して、二タイプの薪ストーブを「ソロー」

その日、ウォールデン池畔は生憎の大雨でした。私は係の人から、雨で室内がぬれては困るといわれてキャビンに入れてもらえず、私は背伸びして窓からのぞいて見たのですが、ソローのストーブは、想像していたとおり小さく、デザインもシンプルでした。カナダで歴史を感じる、贅沢な薪ストーブをたくさん見てきただけに、ソローのストーブは装飾もほどほどで、私が自社のストーブにこめた機能美のイメー

一昨年の第一回の「薪ストーブ・セミナー」は都留市で開催し、全国から50名の参加者が集いました。昨年は秋田県で開催し、白神山地で森を学び、我が社の薪ストーブで焼いた天然酵母のパンを楽しみました。また、今回、本場に偶然にも地元がこの『森の生活』を翻訳された今泉吉晴先生が住んでお

これからの会社では、薪ストーブの火を通して、人と人の心のふれあい、本当の豊かさを求めるライフスタイルを創造する交流の場を提案していきたいと望んでいます。それこそが、作り手と使い手の顔が見える一つひとつが手作りの私の会社だからこそ生まれるトレーサビリティの確かさであり、私の会社の生きる道だと自負しています。

# 自分にとっての薪ストーブ

佐々木寛章

「薪ストーブがほしい！」いつか誰かが発したこの言葉も、自分にとってわくわくするものではなかった。北国育ちの自分してみれば、薪ストーブは身近なものでありながら、田舎やお年寄りの家にしかない非近代的なものであった。まずもって「格好良い家を作りたい」と始めた「アパート再生計画」で、なぜ薪ストーブなんていう田舎臭いものを置かなきゃならんのだという気持ちであった。

そうこうしているうちに冬場にさしかかり、とてつもなく寒くて改装の作業どころではなくなった。また、大量の建築廃材の処分にも困っていた。「薪ストーブがあったら」という言葉が皆の頭をちらついた。以前、大月に手作り薪ストーブの「岡部工業所」がある聞き皆で見て行ったことがあった。実際に見たことにより、薪ストー

ブを使った暖かい生活を皆イメージしていた。デザインもシンプルで非常に素敵なのであった。もう絶対に欲しくなり購入するにいたる。

わが家に薪ストーブがやってくると、まず本当に暖かくて泣けた。それまで寒くて停滞していた作業が活発になり、施工中に関わらず薪ストーブの前で、皆で夕食を食べたり休憩したりもした。薪ストーブでイモを焼いたりすると、作業を手伝ってくれる人がいつのまにか集まってきた。

「つる小屋」が完成した現在、来る人はまず薪ストーブに興味をもってくれる。そしてその周りには自然と人が集まる。皆楽しそうにしているが、まず自分自身、薪ストーブに新をくべ、燃えて揺らめく火を見ていると「アパートを改装してよかったな。自分のアパートで薪ストーブ使う。学生でこ

んな贅沢なことをしている人はいないな」などいろいろな思いが湧き出てくる。いまや薪ストーブをもっとも愛用し、楽しんでいるのは自分である。薪ストーブを購入するに当たり岡部工業所の佐々木さんご夫婦には大変お世話になりました。ありがとうございました。

■購入までの流れ  
2004年9月2日 私が岡部工業所の薪ストーブを初見学  
2004年9月12日 関係者皆で薪ストーブを見学  
2005年1月12日 購入予約  
2005年1月23日 つる小屋へ運ぶ

（ささき ひろあき・本学社会学科4年）



\* 空きアパートとなっていた相沢アパートの2・3階を改装して復活させようという計画。大学の「ワークショップ演習」より出発。グループ「work-waku 都留」内のアパート企画  
\*\* 環境に配慮しゴミを出さない家作りを考え廃材はなるべく再利用した。しかし使えない木材も大量にありゴミ・処分費用の観点から有効な使い道を模索していた。  
\*\*\* 完成した相沢アパートの2階部分を指す。

\* 1854年に出版され、日本でも多くの翻訳が重ねられてきた。2004年に今泉吉晴氏による新訳が小学館より出された。  
\*\* ソローがそのほりに住んだ池の名前で、『森の生活』のメインタイトルになっている。  
\*\*\* 生産物の加工・流通過程などをさかのぼることができること。

# 飽くなき好奇心の歴史

## 「街かど情報 TSURU」

～小宮正廣氏へのインタビュー～

聞き手=桜井明子

『街かど情報 TSURU』は、村松新聞店で月に一度発行しているミニコミ紙だ。都留市と道志村の購読者のもとへ届く。編集を担当しているのは、村松新聞店に勤める小宮正廣さん。1988年の8月に発行された第1号から携わってきた。



小宮さんの取材ノート

「当時、私が従業員のなかでいちばん若手で、あまり責任のある立場じゃなかった。だから最初は取材を頼まれて、原稿だけ書いていたんです」

16号くらいから編集作業全般を任せられ、それ以来ひとりで編集してきた。小宮さんは新聞配達している最中に見つけたものを記事にすることがよくあるという。

「新聞配達中の取材はよそ見みたいなもの。道草してばかり」  
ふだんの新聞配達や集金など、購読者とのやりとりを通して情報が集まってくる。新聞店がひとつの情報収集場所となっている。自分で情報を探す苦労を感じたことはほとんどないそうだ。

\*

自信作として見せてくださったのは、市内長者町に住む組子職人・佐藤重雄さんの記事（2002年2月24日発行147号）だ。

「ふだん職人さんは寡黙でなかなか口を開いてくれない。この時は偶然、佐藤さんを引き合わせてくれた方がいて、炬燵にあたりながら佐藤さんが口を開いてくれて」  
載せたいことがたくさんあるなかで、

ひとつの記事に一面すべてを使うことはあまりないそうだが、この記事には一面すべてが当てられている。  
「気になる人のところへ直接行けるというチャンスがなくて。それがひよんな時に話が聞けたり。そういう時の記事は読者の方にも、いいなあと思ってもらえると思うんですよね」。

\*

『街かど情報』の編集を始めたのと同じ頃に三味線を習い始めた。それをきっかけにさまざまな方向へ関心が広がったという。例えば地域に残る伝統芸能だ。都留にはそれぞれの地区にお神楽（獅子舞）を演ずる小さなお祭りが残っている。

『街かど情報』の発行を通して都留の人に目を向けてもらうことで、活動している人たちの励みになれば」  
小宮さんの作業は、地域のまだまだ知られていない行事にスポットライトをあて、市民や学生に関心をもってもらうという役割を果たしているのだらう。

「古いもので、伝わってきたものが簡単に捨て去られちゃう。お神楽もおしまいになるところが多くて」。

「市内の栄町に住んでいらつしやる田嶋照永さんは、焚き木にするような木切れでも作品になる、って言って、木切れを使ったユニークな彫刻をつくっているんです。そういったものもうまくいけばすくいあげることができるとですけど、うっかりすると忘れ去られちゃうんだよね。『街かど情報』でもこうしたことを自分が拾うには限りがあるから学生に参加してもらえたらいいと思うんですけどね」

小宮さんの「拾う」という言葉からは単に「もの」を拾うだけでなく、失われつつある、形のないものをすくいあげる姿が浮かんでくる。これらは小宮さんの取材に対する姿勢を表しているように感じた。

\*

自分のベースで取材し、編集する。『街かど情報』が20年近く続いてきたのは、こうした編集スタイルとともに、小宮さんの姿を見守ってきた新聞店の存在や、小宮さん自身の飽くなき好奇心があったからかもしれない。今日も小宮さんはバイクを走らせ、都留のどこかで取材をしていることだろう。

（さくらい あきこ・本学比較文化学科1年）

## 障害者の雇用を すすめるための セミナーを開催して

野武 紀之



障害をもった人たちの働く権利の保障について、企業経営の立場から取り組んでいる野武紀之さん（30歳）にお話をうかがいました。野武さんは、都留市内の電子部品製造会社UNITEC社で生産管理の仕事を担う傍ら、都留青年会議所（以下 都留JC）の役員メンバーとしても活動なさっています。

2005年5月、野武さんは、都留JCの社会貢献事業の一環として、障害者雇用促進に関わるセミナーを市内で開催し、70名近くの企業人、従業員、そして障害をもった人々がここに集い、職場や地域で、障害についての理解を深めていくにはどうしたらいいか、学びあう機会となりました。

聞き取り 田中夏子氏（本学社会学科教員）

私がこのセミナーを企画したのは、JCとして社会的な活動を推進しようと思ったからです。地域の人たちや企業で働く多くの人たちに、障害をもつて働く人のことを少しでも理解してほしいという願いがありました。こうした課題を意識するようになったのは、私に、幼い頃からずっと三十年間、一緒に育ってきた聴覚障害のいところからです。そのいところは、現在私たちと共に、この会社で働いています。私は、一緒に仕事をする仲間に、障害者に対する理解や共感をもつともってほしいと考えていました。先のセミナーはそのいいチャンスになりました。職場の、将来的なリーダーにも参加してもらったのですが、障害をもつた人と一緒に働いていこうという雰囲気が高まったように思います。私自身も、いとこの長いつきあい、聴覚障害については理解していた

のですが、その他の障害や、障害をもつた人が働くということについては、知らない点も多く、例えば、「ジョブコーチ」制度についても、先のセミナーで、山梨障害者職業センターの方のお話を聞いて初めて知ったのです。うちの会社にも、知的障害の方が「ジョブコーチ制度」を利用しながら、LS基盤の枠を組み付ける作業に従事しているのですが、身近にそういう例があっても知る機会が少ないことをよく感じました。

ですからこうした情報を発信しながら、実際に障害をもった人が、それぞれの条件にあった仕事をこなし、またその範囲を広げていけることを、地域の皆さんにも知ってほしいと思っています。そういうことも、まちづくりの重要な一つの要素ではないでしょうか。

（のたけ のりゆき・都留市青年会議所役員）

## 障害をもつ方々への 就労支援

志村恵子

障害をもった方々に就労支援を、と長いあいだ思いつづけてきました。多くの人たちの協力があり、その第一歩として2006年の4月より、知的障害者通所授産施設を開所できる運びとなりました。

「障害をもつ方に」就労支援を」と一言に言っても、実際はとても大変で難しいことだと思います。長い間知的障害をもつ方と接してきた私が言えることはただ一つ。知的障害をもつてい

る人たちだからといって、支えるのに特別なものを用意する必要はないということです。

人はみなたしかに必要とされたい、そんな思いを常にもっていると思います。地域社会の中にあつて必要とされ共に生きていくということです。それ

は障害をもった方々にとつても言えることなのです。

一人ひとりが安心して生活していけるような居場所を共に支え、ありのままの自分を受け入れ、本人のもつ特性を活かしながら地域で生活している、そういう場づくりのお手伝いを少しでもさせて頂きたいと私は常に願っています。

障害をもった方々が働くということ、大変なことだと思います。しかし、大勢の人びとと出会い、助け合い、いろいろな体験を通し互いを認めあう、そんな社会参加があつてもよいのではないのでしょうか。

社会福祉法人「あすなるの会」は、そうした社会参加の在り方を目指し、多くの地域の人たちの協力を頂きなが

ら、自分たちのできることを第一歩にして、共に助け合いながら生きていきたいと思えます。

（じむら けいこ・「あすなるの会」東部授産  
園「みとおし」施設長）



\*知的障害者や精神障害者の雇用支援事業。2002年発足。障害者が職場に適應できるよう、「ジョブコーチ」が職場に直接出向いて、仕事に付き添い、指導や支援を行なうと同時に、事業主や従業員に対して、障害者の職場とけ込みのために必要な助言を与える。

# 軽度発達障害の人の働ける場を求めて

母親（都留市在住）

軽度発達障害をもつわが子の数年先の就労問題が気がかりで、三日間だけでしたがある職場を訪ね、「先輩にあたるかな」と思われる方といっしょに仕事をさせてもらいました。

彼は普通に世間話もしましたし、教えられた作業は難なくこなしていました。しかしマニュアルが読めません。また、現在の時刻から24時間後、48時間後の日時がわかりません。彼はノートにマニュアルを書き写し、覚えようと努力していました。覗き見たノートの文字は全て平仮名でした。「漢字が苦手で…」と言っていました。ただ、苦手なだけではないようでした。わが子とタイプは違いますが、軽度の発達障害があるように見えたのです。

「軽度発達障害」と一言で言っても症状は人それぞれで、彼のように読みだけが困難な人もいれば、私の子どものように書くことや話すことなど、自分を表現することに問題をかかえている人もいます。理解と表現の間に大きな差があり、努力不足と誤解されてしまうことがしばしばです。本人は、努力をしても結果が出ず、自分で自分を貶めるようになってしまいます。理解されずらい障害だから、周囲に支援を求められないままに、いつの間にか独りになってしまいます。彼がそんなことになっていないことを、残念です。

念ですが、願うしかできません。私の子どもも、もう少し社会に出なければなりません。そのとき、子どもが笑っていられる方法を、たくさんの方々と相談しながら探していきたいと思えます。

全大会のあと、「幼保小部会」など7つの分科会に分かれて、実践報告と質疑討論が行なわれました。本学の地域交流研究センターの協力も3回目となり、今回は本学の教員である高田理孝氏、粕谷貴志氏（特別非常勤講師）、西本勝美氏、筒井潤子氏、三井須美子氏の5名が助言者として参加・協力しました。



## 掲示板

### ◆都留文科大学地域交流研究センター主催 第二回「地域交流フォーラム」が開催されました

本年度はテーマを「＜地域の教育力＞とは何か」とし、2月25日に2101教室において行われました。

まず、太田政男氏（大東文化大学教授）が「学校と地域を『結ぶ』」と題し、地域が学校をつくる、学校が地域をつくる、という内容をもつ基調講演を行いました。

つづくシンポジウムでは、シンポジストとして遠藤静江氏（元小学校教諭・都留詩友会会長）、志村裕一氏（有限会社共創マーケット「ちいさなお世話」代表）、佐々木裕子氏（岡部工業所・大月市）、太田政男氏がそれぞれ報告・発言をしました。司会は、田中孝彦氏（本学教員）が務めました。

そのあと休憩を挟んで、田中孝彦氏の進行のもとにシンポジストとフロアとが一体となり、活発な意見交換を行ないました。不登校経験のある息子をもつ親御さんなど、それぞれに生活や職場（職業）での貴重な経験や実践をもっており、「地域の教育力」という主題をことさらにふさわしいスケールで深め合っていくことができ、自ずと本学が果たす役割が浮かび上がってもいく充実した交流の機会となりました。また、地域からのシンポジスト全員が本学学生たちとの交流をもっていることも注目されることでした。

フォーラム参加者は、学外の方27名を含め44名で、参加者アンケートによれば太田氏の講演とフォーラム全体が非常に好評でした。なお、このフォーラムの一環として、2102教室においてフィールド・ミュージアム部門による展示も行なわれ、見学者との交流も生まれました。

この「地域交流フォーラム」の記録は、『地域交流研究年報』第2号に掲載される予定です。（編集部）



### ◆平成17年度県民コミュニティカレッジ分科講座」が開かれました

都留文科大学は、地域交流研究センターの事業として、「ハートV（芸術）にふれる」をテーマに講座を組みました。

第1回は、「手びねりによる抹茶茶碗をつくる」というテーマで、安宅正路氏（本学教員）が講師として行ないました（9月3日、4日、10月2日）。第2回は、「シヨパンの生涯―シヨルジュ・サンドとの出会いと別れ―」というテーマで、相森光恵氏（本学教員）が講師として行ないました（10月1日）。第3回は、「オペラに親しむ」とい

うテーマで、清水雅彦氏（本学教員）が講師として行ないました（10月17日）。

全体で、114名の受講者がありました。

### ◆第8回「山梨県地域教育フォーラム 南都留集会」が開催されました

主催：南都留地域教育推進連絡協議会、富士北麓・東部教育事務所、山梨県教育委員会  
テーマ：「子ども達の教育は地域全体で担う」地域連携・地域交流の今を探るⅢ  
日時：2005年11月2日（水）  
会場：富士吉田市立下吉田第二小学校

### ◆平成17年度都留文科大学市民公開講座が開催されました

テーマ「ジェンダーの意味を探る旅（2）ーことば・空間・関係性ー」  
第1回は、『おかあさまのおこころはちひさい』金子みすゞのうたう母子

ー」というテーマで、藤本恵氏（本学教員）が講師として行ないました（1月11日）。

第2回は、「女性と短歌―万葉歌人から近現代歌人まで―」というテーマで、鈴木武晴氏（本学教員）が講師として行ないました（1月18日）。

第3回は、「パートナーは対等な一個の人間―ドメスティック・バイオレンスを考える―」というテーマで、杉井静子氏（弁護士、本学非常勤講師）が講師として行ないました（1月25日）。

第4回は、「居心地の科学を目指して」というテーマで、住吉典子氏（本学教員）が講師として行ないました（2月1日）。全体で59名の受講者がありました。

# 都留の織物業の盛衰に関する研究

都留（谷村）の地域経済と文化圏域の成り立ちを考えると、織物業の盛衰のことを欠かすわけにはいきません。このことは、「都留音頭」（作詞・都留市役所）に次のように歌い込まれていることから分かります（一番）。

都留はよい街 八端機場  
織娘可愛いや チョイト きりようよし  
指は白魚 生糸の肌よ  
恋し想いの 恋し想いの 夢も織ろ

地域産業の成り立ちと変容は、そこに暮らすひとびとの生活・文化、そして子育て・教育にも深い影響を与えずにはおきません。そのようなことを考える素地として、この地域の織物業に関する手堅い研究があることを紹介することにしました。

この地域における織物業の歴史は古く、松本四郎氏<sup>（注）</sup>は著作『町場の近代史』（2000年、岩田書院）で、「谷村が絹織物の集散地として発展していったのは近世中期で、江戸の呉服商である越後屋などが郡内織物を大量に買い付けを始めた元禄・享保期ころからである。谷村の街道ぞいの町並みに越後屋や白木屋、そして大丸屋などの出店が軒を連ねて、郡内絹（甲斐絹）の町としての性格をも

ちはじめたことよって、谷村の町の経済が活性化していったことは間違いない。」と述べています。

和田明子氏は、この郡内・都留の織物業の概況について、研究論文「郡内機業園における産業構造の変容」（1997年）で、次のように述べています。

山梨県東部の郡内機業園は、北都留郡上野原町、大月市、都留市、南都留郡西桂町、富士吉田市などの絹織物業地を包含した圏域をいう。この地域は、群馬県桐生市、足利市、東京都八王子市とともに関東山麓機業地を構成してきた絹織物の産地である。郡内機業地は江戸時代末期に先進地桐生よりジャカード<sup>（注）</sup>の製織技術を学び、先染絹人絹織物業地として全国的にその技術が高く評価されてきた。

早くも1905年に都留市（北都留郡谷村町）には、山梨県立工業試験場が開設され製織および染色業の技術導入が行われた。さらに1915年にはこの地域に力織機が導入され、甲斐絹、八端織物（夜具地、座布団地、風呂敷地）が盛んに織りだされた。（…中略…）第2次大戦直前の時期には、郡内産の甲斐絹織物（洋服用裏地・袖裏地・広幅織物）が中国および韓国まで販売された。1935年当時の郡内機業地の力織機台数は9398台であり、そのうちわけは上野原町1803

台（19%）、大月地区3017台（32%）、都留地区1399台（15%）、富士吉田地区3180台（32%）である。

和田氏とその研究グループは、郡内・都留の織物業について戦後史を中心に詳細な調査・研究を重ねています。それによれば1943年には、郡内機業地の織機台数は15000台にまで達しますが、同年の企業整備によって台数は激減します。戦後は、1940年代末には織機台数・生産数量が急激に増加し、いわゆる「ガチャ

万」（一回織機がガチャと動く大金が入るという意味あい）時代を迎えます。その後も郡内機業は成長を遂げ、1968年（企業数6126）、1969年（織機台数20943）にピークを迎えます。しかし、1974年を境に、郡内機業は縮小の一途をたどっていきます。その傾向を決定的なものにしたのが、中小企業「合理化・近代化」政策として行われた、設備の第一次共同廃棄事業（1978〜1980年）、第二次共同廃棄事業（1985年と1987年）でした。

こうした経緯をたどり、工業分野としては零細企業を中心とした繊維工業は衰退し、一般機械、電気機械、精密機械の分野が比重を増していくことになりました。なお繊維工業としては、新織機である「レピア織機」を導入するといった企業努力がなされましたが、現在は富士吉田地域で若い世代によってアパレル産業などの模索が行われています。（編集部・畑



## 研究紹介

和田明子

私が都留文科大を定年退職してから、9年半になりました。このたび地域交流センターから都留の織物業について書いてくださいと依頼がありました。

都留を中心とした郡内の織物業については、『都留文科大研究紀要』に拙稿が掲載されています。その号数と論文の題名とを紹介させていただきます。

## シリーズ 卒業論文・修士論文などにみる 地域研究の紹介

卒業論文作成として生まれた絵本『マミー』  
執筆者名 平野純子  
2000年度卒業論文  
初等教育学科  
指導教員 三井須美子

都留市内の養豚農家を舞台にした絵本『マミー』が、初等教育学科の卒業論文として2001年1月に製作されました。マミーとは、主人公になった仔豚の名前です。作者の平野純子さんは、味の良いトウモロコシを育てて山梨日日新聞で紹介されたことがありま

「近くの養豚農家にお手伝いに行き始めて二年半、種付けから出荷までを、何度も繰り返して見てきました。母豚の下敷きになって圧死してしまう仔豚や、人間の都合によって強引に去勢させる雄豚…。この仕事をするよう

になって、今までうまいだの、まずいなどと言っていた自分がすごく傲慢な生き物のように見えてなりませんでした。」

手作り絵本にとって大切な絵は、身近に仔豚を見て育った森嶋なつきさんが担当しました。当時、小学校5年生でした。周りの子どもたちは仔豚への関心を臭いに集中させ、なつきさんを悩ませていました。絵を描くことが大好きななつきさんは、鋭い観察眼と豊かな表現力で、マミーを通じた養豚の仕事伝えてくれました。

作品の出来ばえに勇気づけられた平野さんは、なつきさんといっしょに、さらに12冊を手作りしました。それらを持って、付属小学校と宝小学校では読み聞かせをしました。また都留市内の八つの小学校の図書室に絵本を置くことができました。『マミー』を読んだ子どもたちの感想文のなかから、一つ紹介します。

「人のために、生きてしんでいってしまふ。人のために、みみをきられたりしてかわいそうだった。私が今生きているのは、いろんな物にささえられているからだ。この本を読んでよくわかった。」

2004年1月、『マミー』は製本され、新風舎から発行されました。



\* 縞模様の入った絹織物で布団地や和服地として使われた  
\*\* 本学名誉教授  
\*\*\* 紋紙という穴のあいた紙を使って模様を織る装置

ここに取りあげた論考は、私と共同研究者たちとの長い年月にわたる郡内地域織物研究をとりまとめたものです。『都留文科大研究紀要』は、都留文科大図書館で閲覧できます。私共の研究が、学生や市民の皆様のお役にたてば幸いです。

織物調査にさいして、ご協力いただいた市民の皆さまに、この紙面をおかりして心からお礼申し上げます。

（わた あきこ・本学名誉教授）

### 棚本安男さんに聞く

(たなもと やすお・山梨郷土研究会理事、都留市在住)

『通信』8号の特集で大学裏山の尾崎山をとりあげました。その記事を読まれた民俗学者で、都留市立図書館協力委員会の委員長でもあられる棚本安男さん(75)が「大学キャンパスのある谷からかつて一筋の小川が流れていた」といわれた、という耳よりな話を聞きました。また、都留市の陸上競技場がある谷からも、小川が流れていたということですが、いま、それらの谷にふだん水は流れていません。いったいなぜ、そのような推測ができるのか、なぜ、川が消えたのか、『通信』編集部は、棚本さんにインタビューしました。(聞き取り者・今泉)

棚本さんは、尾崎山の水の流れの衰退を考える前提として、郡内の山の戦後の荒れようについて語られました。棚本さんは、子ども時代を大月市奈良子の小金沢で過ごしました。かつて、小金沢には広大な自然林があり、隅田川の両国橋のつけかえのための材木の産地として知られました。小金沢は、自然林から切り出した材木を「てっぼ

う」で出したほどで、豊かな水量があった証拠、ということ。『てっぼう』とは、谷川を丸太のダムでせきとめ、できたダム池に丈六(じようろく)の丸太(長さ一丈六尺の長く太い丸太)をたくさん浮かべたところで、ダムをあげ、丸太を押し流して運び出す方法です。

ところが1948年ごろから、ミズナラ、ケヤキ、クリなどの自然林を全て切つて、そのあとにスギ、ヒノキなどの「経済木」を植える、拡大造林の政策を国がとりました。自然林を切つたこと、材木の搬出のための林道を作つた結果として、山の斜面の表土が大量に流れ落ちました。表土が流れ落ちることを、土地の人は「山がくむ」といいますが、それは、自然林が保つていた土が洗い流されるという意味です。大きな規模で表土が流出し、土石流になる場合には「びやくがとんだ」といいます。

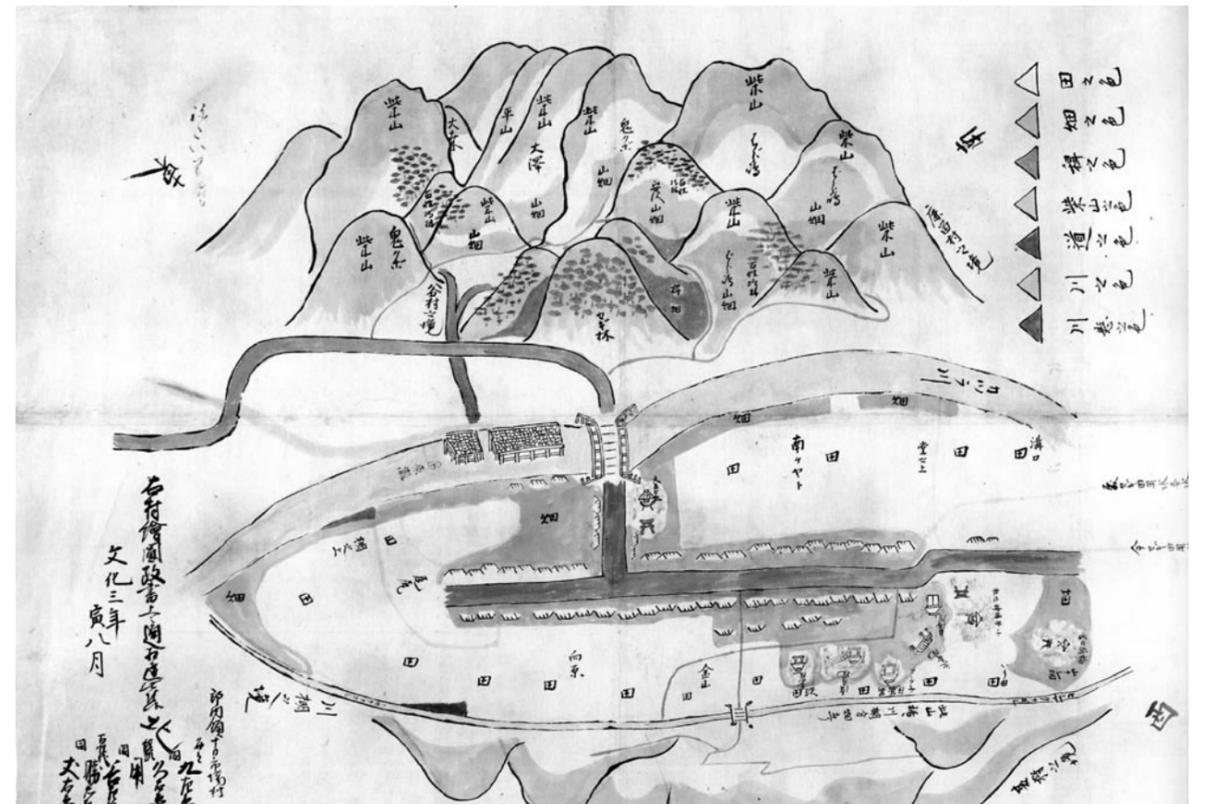
このため沢や谷が土砂で埋まりました。棚本さんが子どものころ、奈良子の溪流は川のように大きかったのに、今はちよろちよろの沢水しか流れません。それに、子どものころには、溪流は場所によって淵になって深い水をたたえ、跳び越えるのが怖かったのに、今は、またいで渡れるほどの浅い小

な流れになりました。何々淵と名がついていた深みが、土砂で埋まり、「おかま」(炭焼きのかまのように、崖でまるくかこまれた深い淵)などと呼ばれる特別の地形が消えました。都留でも、桂川のおなん淵の深いよどみが埋まり、田原の滝も後退がひどく、往時の迫力がありません。

この大きな変化について、棚本さんは「私は民俗学的な関心からくらしを見て、大きく変わったと分かりません。私はこうして見えるくらしの変化から、先祖のくらしを考えます。批判的にもなるが、それが本当だろう」と述べられています。大学の裏山である尾崎山も、戦後、尾根近くにあったク

の山林と似た時代の変化をこうむっています。そして、もちろん、尾崎山が荒れたのは戦後の伐採だけでなく、明治の乱開発、あるいはそれ以前の山の利用の影響も大きかったはず、と考えることができません。となれば、今は淵れ沢になってる沢にもかつては水が流れていた、と考えるのも不合理ではなく、小字名として残る大学上の「やまめ窪」も、じつさいにヤマメが住むお

かまだつたのかも知れません。棚本さんは、尾崎山のかつての姿を知るには、文書にある文化三年の「十日市場村絵図」(ミュージアム都留収蔵の都留市文化財)が重要な資料になるといわれます。「十日市場村絵図」の中央左上に、尾崎山から流れ出る二



森嶋基進が谷村近在の村に書かせた絵図の一つである「十日市場村絵図」には、村の山であった尾崎山から流れ出る二筋の川が描かれている。そのうち東側(左手)の川は現在の文大キャンパスがある谷を流れ、もう一筋の西側の川は、音楽棟の西の谷を流れた。両者は音楽棟の下手であわさって一本の川となり、家中川にそそいだ。現在は、どちらの川も消滅している。この古い川は、家中川が造られる以前の時代には、自然河川として谷村の集落をうるおしたであろう。この絵図が描かれた当時、桂川を渡る橋は、現在の佐伯橋より上流側の田原の滝より上手にあった。(絵図は、都留市史資料編、都留市、昭和63年発行より)

筋の小川が描かれていて、その流れは家中川に引き入れられていたと解釈できる、ということ。すなわち、大学キャンパスのある谷と陸上競技場がある谷から、それぞれ溪流が流れ出て、小川となつていて、と分かります(オレンジロード脇のドブがその流れ

跡と理解できます)。このことから谷村城主だった秋本氏が家中川を造出した際に、自然の川の流路を拡張して家中川という用水にしたと推測できる、ということ。もとは田原の集落でつかつていた尾崎山から流れる小川を、町の規模で使えるようにしたのが家中川であり、尾崎山は家中川以前の時代の谷村の水源地であり、その時代には、谷村に水がなかったと考えるの

は間違い、ということにもなります。現在、尾崎山には八沢の泉と一升巻の泉の二つの泉があつて、年に二、三度の大雨のあとには、川となつて家中川へそそぎますが、その川は「十日市場絵図」に描かれた二筋の小川と符合

します。つまり、八沢の泉と一升巻の泉は、かつての二筋の小川の名残です。尾崎山の森を回復することは、また、キャンパスを緑化すること(は)、川をよみがえらせることに通じ、過去を考へることは未来を創造することでもありと分かります。

(このインタビューは2005年10月12日に、都留市立図書館で行なわれました)



①



②



③



④

文大近辺をめぐる現在の用水の流露は、道路の造成工事などでつけかえが行なわれ、かつての位置からずらして側溝などに変えられている部分が多い。それでも、用水をたどってみると、その流れの向きはたえず土地の形状を反映している、かつての川のおよそのありかを指し示しているように思える。

- ①音楽棟の脇を流れる側溝はバイパスに出ると西に流れて家中川にそそぐ
- ②田原の滝上の谷村大堰からとりいれられた家中川の流れ
- ③寺川は文大前駅の西で家中川の本流から分岐する
- ④寺川は文大の谷の扇状地のすそを巡って流れる



- ①「図書館まつり」への参加
- ②附属図書館ビオトープの植樹祭開催

フィールド・ミュージアム部門では、今年度、新たな取り組みを行ないました。一つは、都留市立図書館と協力した「図書館まつり」への参加です（2005年10月27日～11月9日、都留市立図書館図書閲覧室にて開催。関連記事5頁）。都留市の森で着想し出版された数々の絵本を紹介しました。二つ目は、国際ソロプチミスト山梨・芙蓉との共同事業として本学の附属図書館で行った植樹祭です（2005年10月1日開催）。どちらも地域交流研究センターの特徴を活かした取り組みが期待でき、今後も継続的に交流を深め育てていきたいと考えています。二つの事業に参加した学生、市民のかたに感想を記していただきました。



都留市立図書館で開催された「絵本まつり」

# 「図書館まつり」に参加して

成瀬洋平

西 教生

都留市立図書館との共同での図書館まつりのために私は絵を5枚描き、絵本展示のスペースへ飾らせていただきました。描いた絵にはそれぞれ「ムササビ」「リス」「里山を歩く母子」「森のなかの大きな木」「たもを持って遊ぶ」というタイトルをつけました。

今回の展示の話聞いたとき、秋の展示ということなので展示スペースにほんわかとした雰囲気がつくりだせればと思います、また絵本のなかの絵が外に飛び出したような展示にできればと考えました。図書館の展示スペースには木の温かさと落ちついた雰囲気があり、また図書館で用意していただいた木製の額のおかげで、そのなかに自然なかたちで絵を展示することができたと思っています。

絵本という絵と文章での表現に関心をもっていただくため、このような展示に参加できたことをうれしく思います。そして、このような絵が森へ出かけるきっかけとなってくれば、今度は子どもが部屋から飛び出すことになりそうです。いつかそんな絵が描けたらな、と思いました。

（なるせ ようへい・本学比較文化学大学院生）

都留市で構想され出版された絵本のなかに登場する、動物の展示をつくりました。ムササビやリス、野ネズミなどの都留の森で出会える哺乳類、観察される鳥類の写真。また、彼らの暮らしの痕跡や木の実を見ていただきたい、自由にさわっていただきたいと思っ動物も展示しました。クルミがどれほど硬いのか、アカマツの種をどのように食べるのか。暮らしの痕跡は裏山に落ちていて、少し注意深く探すだけでどのような動物が暮らしているのかわかります。

ちょうど森には、たくさんどんぐりが落ちていた時期でした。ドングリを食物にするのは誰か？ このような疑問の謎を解くカギが絵本のなかにあります、絵本に出てくる世界は裏山にあります。森で暮らすための彼らの「ワザ」。たとえば、リスはクルミをどのようにして割るのか？ これの答えもまた絵本のなかにあり、裏山で確認することができます。

展示を見ていただいたかたに動物たちの魅力が伝われば、今回の企画は成功したものと思っています。

（にし のりお・本学社会学科4年生）

# 附属図書館ビオトープの植樹祭に参加して

鈴木正子

愛知万博の閉幕にあわせて、「HAND IN HAND」アジアの子どもの秋の植樹祭の一環として、10月1日、都留文科大内のビオトープ周辺で植樹祭が行われました。

私も、6歳の息子と9歳の娘と参加しました。子どもたちには何も知らせずに、当日その場所へ連れて行きました。そこで、同大学の今泉吉晴教授のお話を聞くと、自分たちがどうしてこの場所について、今から何をやるのか、そして、それがどんな意味をもっているのかと子どもたちなりによく理解できたようでした。そのせいか、苗木を植えるさいにその木に合う穴を掘り、やさしく木に触れたり、話かけたりしていました。

「カブトムシやチョウや鳥がいつばい来てくれる、この木にたくさん卵を産んでくれるといいなあ」

「ぼくたちが大人になったとき、この木はどのくらい、大きくなるのか

なあ」とまるで仲間ができたかのようにうれしそうでした。そして、子どもたちはその木に、「ミール」と名づけました。ロシア語で「平和」の意味です。彼らの願いがその名にこめられていました。

私たち人間が、どれほど都会化しても、昆虫から哺乳類に至るすべての生物を含めて、生きた自然と一体なんだ、仲間なんだと感じる1日でした。子どもたちの小さな手が、一本の木を植え、その木が大きく生長し、株となり、森となる。そこに虫がいて、鳥が美しくさえずり、その歌をきく人々がいる。そう思うだけで幸せな気分になります。

そして、子どもたちが言いました。「お母さん、なんか自然の音が聞こえてくるようだね。ミール、また会いに来るね」と。

（すずき まさこ・都留市在住）



# 附属図書館ビオトープの一年

羽野 幸

加藤宏明

【フィールド・ミュージアム部門の活動報告】

## ③ビオトープづくり

去年よりも、にぎやかになったという感じが1年間を振りかえった感想です。ヤゴやコオロギやメダカの数が増えました。その反面、オタマジャクシの数が減ってしまい、カエルの姿はあまり見られませんでした。また、アカジソやネムノキが自然に生えてきました。アズノ木は、初めて実をつけジャムを作りました。来年度はもっと生きものが増えるだろう、と想像するとわくわくします。

附属図書館ビオトープづくりが始まって2年が経過しました。キャンパスのビオトープを自然に親しむ入口となるよう育てていくことは、フィールド・ミュージアム部門の大切な活動の一つです。この活動に参加した本学の学生に作業の感想を記してもらいました。

また、キャンパスでは附属図書館のほかにも身近な自然を楽しむビオトープづくりを行っています。本学一号館裏の雑木林の再生に向けた取り組みもあわせて紹介します。

(はの さち・本学社会学科4年)

今年の冬、メダカ池に、分厚い氷が張りました。一見、変化がないように見えても、冬芽や、ロゼットなどが見られます。動きの少ないときの楽しみ方を見つけると、冬のビオトープも魅力的になってきます。

1年目の夏はクローバーにおおわれただけの単調な風景でしたが、いまではさまざまな植物が定着しています。昨年は、毎週ビオトープの様子を見て回り、草刈りをしました。そのたびに植物のたくましさに驚かされました。

今でも心に深く残っているのは、昨



附属図書館ビオトープの池で育ったヤマアカガエル

年の夏、池のメダカを観察する子どもたちの姿に出会ったことです。水面を覗く子どもたちの真剣な目が、私を驚かせました。50年後、私がここを訪れたときビオトープはどうなっているのでしょうか。そのときを楽しみためにも、この2年間のビオトープの世話は忘れたくありません。

(かとう ひろあき・本学社会学科4年生)

## 都留文科大学に相応しい林へ……

### 一号館裏の雑木林再生の取り組み



6月になると可憐なユキノシタの花で足の踏み場もないほどでした

一号館裏の雑木林は、約30年前に当時の理科教室の教員と事務職員が中心となって植樹した手作りの林です。コナラ、オニグルミ、クリ、ホオノキ、ケヤキ、ブナ、モミ……この林には大学周辺の山に自生する種が多く、林床植生も30年かけてその環境に適した植物が定着しています。数年前の伐

採・強剪定によって林床が明るくなりすぎ、成長の速い雑草やタケ、ササが生い茂り、藪と化してしまいました。昨年の夏、生物ゼミの学生と教職員によってササやタケ、下草が刈り取られ、少し見通しのよい林になりました。現在、初等教育学科の生物ゼミでは、「自然の営みが観察できる環境教育林」として、また「学生や教職員にとつての憩いの場、思索や探求の場」として一号館裏の林を再生するための取り組みをはじめます。今年度は、下草を刈って、歩道を整備し、樹木に名札を付ける予定です。野鳥やリス、野ネズミたちにきてもらうために、彼らが好む果実やナッツを付ける樹木の苗床も作りました。今後は、四季折々に観ら

坂田 有紀子

れる草花や昆虫の解説板、野鳥や野ネズミのための巣箱や観察スペースを設置できればと考えています。そして、単なる植物園ではなく、生き物と環境との関係、生き物どうしの係わり合い、生態系のはたらきや仕組みが実感・体験できるような仕掛けや工夫を凝らしていきたいと考えています。

教職員のなかには、「周りに自然がたくさんあるのに大学内に林なんて要らない」、「駐輪場にすべきだ」といった意見もあるようですが、本当にそうでしょうか。ほとんどの人は周りに自然がたくさんあっても景観として見ているだけで、森に分け入って自然に触れ合うことはないのではないのでしょうか？ だからこそ、一号館裏の林は

必要なのだと思います。身近な自然のなかに発見する驚きと感動、それは私たちの感性と知性を豊かにしてくれます。「人間探求」の学問の府に相応しい林、それは自然と人間が共存できる場所、長い年月をかけて成熟した自然がもつ豊かで調和の取れた空間だと思います。そんな林になることを祈って、皆でこの林を見守り、育てていきませんか。

(さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員)



林床で穴の開いたクルミをたくさん拾いました。オニグルミの実を食べに野ネズミがやってきていることがわかります。



## 多くの人に支えられて稲刈りを終える 「たんぼクラブ」の実践

ごんもり  
| 権守達也

晴れ渡る空の下、私は田んぼクラブの稲刈りに参加しました。もともと、稲刈りが行われる予定だった日は雨が降り中止になってしまいましたが、今回（10月15日）は無事に快晴となり絶好の稲刈り日和となりました。さっそく軍手をはめて鎌をもち、稲を刈り始めたのですが、最初のうちはスムーズに稲を刈ることができず手間取っていました。そこでベテランの方に鎌の「引き方」を教わったところ、ひと引きで簡単に刈ることができるようになり、だいぶ楽になりました。しかし、刈っている間は終始、中腰だったのでかなり足腰が辛かったです。半分まで刈り終わった後は機械に稲刈りをしてもらいました。実際に自分



の手で稲刈りをしたあとだと、機械がいかに便利かということも、身をもって感じることができました。その後刈った稲をまとめて天日干しを行いました。まとめた稲を一つ一つ掛けていくことも、ちょっとした工夫が必要だったりして、思ったより大変な作業でした。印象に残ったのは、作業をしているときエルやクモなど色々な虫を見つけたことです。一つの作物を作るにしても、自然に生かされているんだ、ということを実感しました。そして、農家の方がどれだけ苦労してお米を作っているのかということを感じ、食べ物大切さを再確認することができました。

（ごんもり たつや・本学社会学科1年）



右からイノシシ、食痕、足跡

2005年度は、二つの稲作の試みが行なわれました。一つは「たんぼクラブ」のもので、大学から徒歩で7〜8分の、人家のそばの休耕田を活用しようとしたものです。市の職員や農業委員会の方、県の農業改良普及センターの方々の支援・協力を得てですから、失敗は許されません。事実、見事なコシヒカリがモミ米で約420キログラム（白米で約280キログラム）を収穫することができ、みんなで分け合いました。30名ほどの学生と教員、そして地元の方々の貴重な交流の経験ともなりました。

もう一つの試みは、「フィールド・ミュージアム」の実践によるもので、大学から徒歩で20分くらいの位置にある、柄杓流川と山との狭間に作られた田の一部を復興しようとしたものです。関わったメンバーは教員を入れて11名ですが、実った稲は、その収穫予定日の2日前に、イノシシに食べつくされていました。イノシシは川側を迂回し、防護柵の合板の一枚を突破していました。その食痕は感嘆するほかに、名状し難い気持ちを引き起こすものがありました。人間と野生動物との貴重な「交流」の機会となったわけです。（編集部・畑）

## フィールド・ミュージアムの 稲づくりに参加して

| 前田恵子

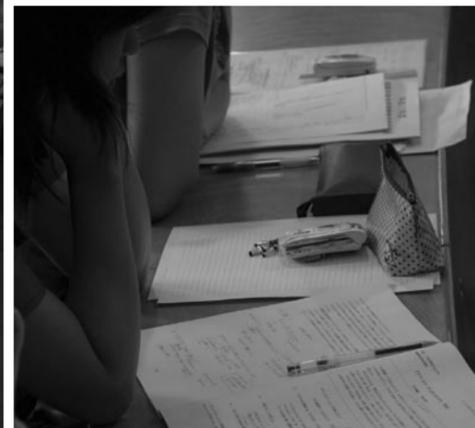
ふだんスーパーで買っていると、お米というものは、いとも簡単にできているような気がする。そのうえ、毎年秋になればあたりまえのように、黄金色のじゅうたんを見ている。そんなわけで、くいしんぼうな私は、田植えのとき、できたときに口にするであろうお米の味を想像していた。現実というのはいつも思いがけないところで壁がたちはだかるものだ。じつさいやることで知った大きな壁、それは野生の知恵という壁だ。自分で植えたものはもちろん、フィールドに植えたイネを余すところなくイノシシ

が完食していたのだ。しかも食べられたのは、収穫の2日前だという。まるで、私たちの動きをずっと見ていたような行動だ。食痕もじつに見事。以前、手動式の脱穀機を使ってムギを脱穀したことがあったが、その時のムギと比べてすこしも遜色ない。完敗である。正直なところ、とてもくやしい。ただし、くやしいからイノシシを退治しようなどとは思わない。このくやしきは、コメを食べられたからというより、彼らをあなどっていた自分自身に対してのものだからだ。むしろ、尊敬の念がわいてきた。道具をなにも使わずにどうしたらこれだけのことができるのだろうか？ 人間は生物の頂点にいるような錯覚をもちがちだが、まだまだ学ぶことは無数にあるようだ。なにはともあれ、来年こそは収穫祭を催したい。この企みを成功させるためには、まずはイノシシのことを知ることからはじめる必要があるそうだ。これからは彼らの食痕、足跡などを注意深く観察したい。

（まえだ けいこ・本学初等教育学科3年）

## 現職教員講座

第5回を迎えた本年度の「夏季集中講座」は、「困難を抱えた子ども理解と学校」というテーマで、7月27日から29日までの三日間のスケジュールで開催されました。  
 本学教員の田中孝彦氏、森博俊氏、筒井潤子氏の三名が講義し、毎回120名〜130余名の受講参加者がありました。  
 なお、このときの講義内容は、『教師の子ども理解と臨床教育学』として出版されました（群青社・2006年1月）。



## 子どもたちと深く交流していく条件整備を

板倉保秋

一が大変難しいことがあるように思います。昔から言われているように、教師の力量をさまざまな形で磨いていかなければ、この問題は解決しないだろうと思います。

「子ども理解のカンファレンス（協議）」は、これから教師が、指導の力量を高めていくためにも、また困難を抱える児童生徒を救うためにも、大変有効な手段であると思います。

田中孝彦先生の、「子どもたちの間の「学習からの逃走」「学力低下」と言われる状況の広がり」は、子どもたちの知的要求が衰弱してしまったのではなく、社会と学校が学習の機会を用意できないでいることの結果であると判断すべきであろう、というご意見に賛成です。

教育予算を削るのではなく、大幅に増やして、一学級の定数を減らしたり、教師の力量を高めたり、専門的機関等も増やすなどして、憲法に保障される行き届いた教育を実践する条件を実現してほしいと思います。

（いたくらすやすあき・都留文科大附属小学校教員）

一 二日間を通して先生方が話しして下さったように、学級崩壊問題、「キレル」子どもや発達障害をもつ子どもなど、難しい課題を抱える児童生徒の教育を成り立たせるためには、その子どもを丸ごと理解し、現実を率直に受け入れることから始まるのだと思います。

しかし、現実問題となると本当のところがなかなかつかみきれないことや、その子に関わる大人たちの意思統一が難しいです。

「**困**」 難を抱えた子どもの理解と学校」というテーマに惹かれて同僚数名と参加した講座でしたが、日頃自分の中で悶々としていたさまざまなことが「腑に落ちた」三日間でした。

この講座を通しての私自身のキーワードは、「子ども理解」「ゆるむ」「カンファレンス」の3つでした。日々子どもたちと接していると、たしかに

今日問題とされているような危機的状況が、子どもたちのなかにあることは否定できません。けれども、子どもたちのもつ伸びようとする力、「まだまだ捨てたものじゃない」と思える人間としての力を感じることもしばしばです。そういった子どもたちのことを、真に理解する努力を怠ってはならないと痛感しました。そして、「子ども理解」を深めることを学習指導にも貫くという言葉には、非常に共感を覚えました。

また、子どもについての理解を深めていく場としての「カンファレンス」は、とても重要だと考えます。子どもと関わる大人たちが形式張らずに「協働」していくことができれば、本当によいと思います。

しかし、現実問題として、今の学校現場ではなかなかそれが難しいと感じています。講座の最後に森博俊先生が示唆して下さった「校内委員会」のようなものを、気軽に持つことができればと願わずにはいられません。

（かわむら ちえこ・下吉田第一小学校教員）

## 真の子ども理解とカンファレンス（協議）を希求する

川村千恵

## 都留を繋いだ「ビクトリア合唱団」 & 都留市合唱連盟演奏会

清水雅彦



最初に都留市内の合唱グループが演奏し、それからビクトリア合唱団が登場しました。その洗練された演奏は、人間の悲しみと怒りと喜びの、あらゆる感情を呼び覚まし、私たちの内にあるすべての「国境」を溶かしてくれました。表現・芸術活動が果たす「交流」の価値は、計測し難いものとして地域文化の力となっていくでしょう。(編集部)

歌声に優しさを見出した時、誰しも言葉を失うほどの感動に包まれる…。まさに人の持つ想いが繋がった瞬間でした。

この夏、京都で開催された国際的なイベント「世界合唱シンポジウム」に招聘された中米・グアテマラ共和国ビクトリア合唱団の演奏会が、8月3日(水)19時より都留市文化ホールにて催されました。

公演の後に、「都留って凄いなって、市と大学と市民とが一体となり大きな文化・芸術交流を成し遂げたことに、真摯で、あたたかみのある都留を再認識した次第です。共催・後援くださった各関係の皆さまをはじめ、共演くださったコール大輪(指揮・天野行)、ベリータ(指揮・澤田洋二)、都留女声合唱団「泉」(指揮・清水靖夫)の皆さま、そして一行の通訳としてお心配りくださった比較文化学科の重富恵子先生に、この場を借りて御礼申し上げます。これからも都留を想い、都留を繋いでいきたい、そして世界に向けた発信をして行きたい、心からそう願っています。

＊(主催)都留文科大学音楽教室、共催)財団法人 都留楽友協会、後援)都留市合唱連盟、都留市文化協会、山梨県合唱連盟

(しみず まさひこ・本学初等教育学科教員)

## Reader's Voice 読者の声

以下の「読者の声」は、編集部メンバーへの私信として書かれたものです。ご本人の了解を得て、私的な部分を略して紹介します。なお今回は、本学の関係者以外の方からのもので編集しました。

◆都留文科大学の『地域交流センター通信』をいつもお送りいただき、感謝しています。とても読みやすくそして内容の充実した編集に、ご苦労が伝わってきます。写真と文章がひびきあってとてもいいです。地域の自然とそこに住む人びとの息づかいが伝わってくる通信ですね。次号も楽しみにしています。  
(増山均氏・早稲田大学教授)

◆昨日『地域交流センター通信』をいただきました。まだ詳しく拝見できておりませんが、これが大学の公式刊行物かと驚きました。モノクロでありながらビジュアルで、しかも内容豊かという印象です。公立大学として都留市に根付いた研究・活動を進められる成果が詰まっている感じです。  
(佐藤進氏・中央大学兼任講師)

◆お送り頂いた『地域交流センター通信』第八号、たいへん楽しく、また一種の感動を覚えながら拝読させていただきました。まず巻頭の分田順子氏の素敵なエッセーに感動しました。このような感性を私はまったく持ち合わせていなかったからです。また、大学がフィールド・ミュージアムの中にある、というか、その一部になっているという感じがして、同じ大学に席をおく者として、たいへん羨ましく思いました。「たんぼクラブ」も大学の新しいカリキュラム「地域交流研究」もびっくりでした。できれば次号も拝見したいもの、と思いました。  
(奥田泰弘氏・中央大学教授)

◆『地域交流センター通信8号』を読ませていただいて、まるで私たちの会報と兄弟のような「通信」と思いました。親しみの気持ちが湧いてくる、この気持ちの源泉はなんでしょうか。会の副代表のMさんに話すと「ぜひ見せてください」と言っていました。Kさんも「ぜひ読ませてください」と…。Yさんは「一冊しかないの?こっちにも回してね」と言っていました。  
(池上理恵氏・静岡自然を学ぶ会)

◆『地域交流センター通信』vol.8をご恵送頂き、ありがとうございます。特集のフィールド・ミュージアムの諸論文、興味深く、また一貫して追究されている今泉(吉晴)先生の姿勢に敬服いたします。また、学生の卒論「都留文科大学の成り立ち」の内容、興味深く思いました。一度拝読できないものかと思えます。このところ、地域社会と大学のパートナーシップ研究を追いかけ、研究室のフィールド・スタディにしていますので。

◆『地域交流センター通信八号』、ありがとうございます。多彩な内容-地域の自然、歴史、人間のつながり-を見すえた編集を通して、これからの大学のあるべき姿も見えてくるような、目配りのきいた、誠実なとりくみ。今泉先生の文章で、芭蕉と谷村とのつながりをはじめて知りました。  
(北田耕也氏・明治大学名誉教授)

センター通信8号に寄せて

◆『地域交流センター通信』vol.8をありがとうございました。こうした活動の積み重ねが、少しずつ人の心を和ませて、やがて人と人とをつないでいくことになるんでしょうね。「地域交流研究」の授業実践を楽しみにしています。  
(森川貞夫氏・日本体育大学教授)

◆先日は、『地域交流センター通信』を送っていただき、ありがとうございます。大学が発行しているとは思えないような味わい深い内容で、ほっとするような読み物です。  
(松田武雄氏・九州大学教授)

◆(…前略…)あの「通信」はいいと思います。長く続けて下さい。共同下宿の話や、米作りの話など、面白い。下宿の問題から垣間見えてくる現在の学生のメンタリティは、砂粒の如く孤立して、どこも同じですね。大学の知を地域に向かって開くには、「啓蒙してあげる」というスタンスでは駄目だし。地域の人で書ける人にはどんどん書いて貰い、書けない人にはどんどんインタビューしたらどうかなあ。米作りを手伝ってくれている人など、莫大な(掘りおこしていけば)情報を持っているのではないだろうか。しかし、「独裁者」だったのかも知れないけれど、文大創った人は偉い!それにしても、どうして創れたのかね?(…中略…)図書館が地域図書館にもなっているのなら、リサイクル市が同時に街の人のマーケットになってもいいのかも。地域ぐるみの、文大ならではの、文大でしかできない、地道だがユニークな試み、ぜひこれまで以上に推し進めていってください。

(北彰氏・中央大学教授)



## 編集後記

○日中韓の共同歴史教材づくりという画期的な取り組みが行なわれ、昨年春に、その最初の成果である『未来をひらく歴史』が三国で刊行されました。その取り組みの過程では、いくつかの認識の違いが浮き彫りになったといいます。この共同歴史教材づくりの担い手の一人である笠原十九司氏は、「東アジア市民社会の形成には世界市民的な立場からの歴史認識の共有が不可欠」という課題を提起しておられます（巻頭文）。「世界市民的な立場」とは、文化の根源のことを意味するように思えます。

○地域交流研究センターは、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「くらしと産業部門」という恒常的な三つの部門において交流活動をすすめています。本号の特集では、変貌しつつある地域のくらし・産業に地域交流研究センターがどのように迫れるかを模索しようとしてしました。薪ストーブとつみ木については、おもしろい展開可能性があるように直感されます。小宮氏の（「街かど情報 TSURU」）の「拾う」は、仕事と文化に対する眼を示しているようです。障害をもつ方の就労のことなど、これからも生活者の真実というべきものに心を向けていきたいと思えます。

○読者からは、「私の大学などでは、このような丁寧な編集をした、また内容的にもレベルの高いものを発行するゆとりがありません。都留文科大学の皆さまの大学と地域への思いが伝わってくるものでした。」といったお便りなど、激励の声が届いています。実は私たちにも「ゆとり」がありません。それでこの通信の発行を、年二回ということにしました。

○本号の編集では、何人もの名誉教授の方々に知恵をお借りしました。とくに  
お名前は記しませんが、これからもご支援をお願いいたします。

○次号は、「地域と教育」（仮題）を特集する予定です。（編集長・畑潤）

絵・成瀬洋平（本学比較文化学科大学院1年）  
DTPアシスタント・徳永佳世（本学比較文化学科4年）

地域交流センター通信 第9号：2006年3月24日

編集：都留文科大学地域交流研究センター・通信担当（今泉吉晴・田中孝彦・森博俊・畑潤・田中夏子・西本勝美・粕谷貴史・北垣聡仁）

（C）発行：都留文科大学地域交流研究センター

F 402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341（代）

統括編集者：北垣聡仁

